

連載
①

日本人ヤングムスリムとの出会い

社会が抱える問題を見るために

早稲田大学修士 伊藤 亜衣



目次

- まえがき
- 第1章 入信—なぜ私はムスリムになったのか
- 第2章 ボーンムスリム—揺れる心
- 第3章 教育—日本でムスリムを育てる
- 第4章 ムスリムから見える日本社会
- あとがき

● まえがき

2001年9月11日、小学生の私が、学校から家に帰ると、険しい顔をした母が「見て」とテレビを指さした。高層ビルから黒い煙が上がっている映像が流れていた。何が起きたのか分からず、うぜんとただ画面を見ていた。この時の私を知るムスリム（イスラム教徒）はテレビの向こうにいる武器を持った男たちか、戦渦を生きる女性や子どもたちだった。

私がいかに初めてムスリムに出会ったのは18歳の時だった。日本の高校を卒業し、オーストラリアの大学に進学した。移民大国のオーストラリアで入学直後に知り合ったインドネシア人のブディは、熱心なムスリムだった。1日5回必ず礼拝をする。一緒に街のピリヤードに出掛けた時も彼は

突然姿を消し、15分後にはまたピリヤードを始めた。私が初めて友達になったムスリムだった。誰にでも優しい笑顔の絶えない好青年。「ムスリムにこんな人もいるんだ」と驚いた。

ブディとの出会いから半年後、日本人の父とインドネシア人の母を持つヒロを友人に紹介された。一緒にスパーに行つたある日、ヒロは「俺、豚肉食べないんだ」と言った。彼もまたムスリムだった。しかし、ブディとは違ってお祈りはせず酒を飲んだ。ムスリムと言えば、ブディしか知らない私には驚きだった。熱心なブディと自己流のヒロ。この2人との出会いが始まりだった。

その後、日本へ帰国して出会ったのはイラン人の父と日本人の母をもつレイラだった。レイラもまたムスリムだ。ヒロと同様お祈りはしない、お酒は飲む。そしてスカーフも被っていないかった。「豚肉はなるべく避けるよ。でもサラミは大好き」。彼女の家の冷蔵庫には常に生ハムかサラミが入っていた。

ヒロとレイラに出会って、ムスリムのイメージが崩れた。毎日決まった時間にお祈りをし、酒を断ち、豚肉は食べない。ムスリムはたかさんの禁止事項に囲まれて窮屈に生きていると思っていた

自分が情けなくなった。私は彼らのことを何も知らなかった。

ムスリムは恐ろしいテロリストか、貧困にあえぐ難民。テレビの向こう側の人々で、地球上のどこかに暮らしている遠い人たち……。そう思っていた私の中の先入観はムスリムとの出会いの中で徐々に消えていった。彼らに出会ったことでムスリムにもいろいろな人たちがいることを知った。今、思えば当たり前のことだったのかもしれない。私たちが日本人にもいろいろな考えを持つている人がいるように、ムスリムを—くくりにはできない。

もつといろいろなムスリムに会ってみたい。そんな好奇心から取材を始めた。初めはモスクに行つたり、人づてに紹介してもらつたり手当たり次第にムスリムに会つたりしていた。そこで徐々に自分と同世代の若い日本人のムスリムに話を聞いてみたいと思った。日本の若者と言えば、ファッション、飲み会、恋愛……などで頭の中は毎日大忙し。そんな中で、日本人とムスリムはどのような両立しているのだろうか。ムスリムが超少数派の日本でどのように暮らしているのだろうか。彼らに聞きたいことは山ほどあった。

私がいかに初めて日本人ムスリム取材したのは14年6月20日だった。東京の代々木上原にある国内最大のモスク、東京ジャーミイで広報を担当する下山茂さん(66)がその人だった。その時に下山さんから聞いた話の一つがイスラムに対する日本人の意識だ。「日本人はヨーロッパ人ほどイスラム教徒に対する露骨な差別はしない。表には出さな

いけど偏見や差別意識を持つている」

その翌年2月に名古屋モスクの涉外担当の日本人ムスリムからも全く同じ発言を聞いた。

「日本人は偏見があるけれど、差別はしない。欧米の人はあからさまだけれど、日本人は心の中だけで堂々と見せないから」

これは一体どういうことなのか。なぜ日本人ムスリムの2人は、そう考えるのか。この問いから日本社会が抱える問題が何か見えてくるのではないだろうか。その答えに迫ることも日本人ムスリムに話を聞く理由の一つだった。私は彼らに会いに行った。なお、一部の登場人物は本人の希望で仮名とした。

第1章 入信—なぜ私はムスリムになったのか

「あの時、人の視線がすごく変わった」とスカーフで髪を覆った日本人ムスリム須田綾さん(33)が話した。「あの時」とは、15年1月7日のフランス・パリの週刊誌シャルリ・エブド本社襲撃、2人の日本人質殺害とイスラム過激派による残忍な事件が立て続けに起きた頃のことだ。

「今まで変な人だなという視線だったのが、恐怖心の混じった視線になった。視線の質が違った。周りのムスリムの人もそう言っていたから、やはりそうなんだと思いました」

このところ、世界中でイスラム過激派によるテロが相次ぎ、その残虐行為はとどまることを知らない。新聞やテレビなどのニュースでは「イスラム」を見聞きしない日はないほどだ。「イスラム」の名を掲げてテロ行為を続ける過激派のせいで、

欧米を中心に反イスラム感情が高まっている。

他方、世界のイスラム人口は増え続けている。ワシントンにある独立系調査機関ピュー・リサーチ・センター (Pew Research Center) の調査によると、10年におよそ16億人だった世界のムスリムは50年には28億人に増加すると予測されている。世界人口の30%がムスリムになり、最も多いキリスト教徒の31%に迫る勢いだという。

イスラムとはアラビア語の「帰依する」の名詞形であり、「アッラーの教えに帰依すること」を意味する。そしてムスリムとはアラビア語でイスラムに入信した者を指す。

ムスリムには「六信五行」と呼ばれる義務が課される。「六信」とは信仰上の義務が六つあり、「五行」とは行う義務が五つあるという意味である。「六信」は、アッラー、天使、啓典、預言者、来世、定命の六つを信じること。「五行」は信仰告白(シャハーダ)、礼拝(サラート)、断食(サウム)、巡礼(ハッジ)、そして喜捨(ザカート)を行うことである。

だから、イスラム教に入信するに当たっては、まずシャハーダをしなければならぬ。シャハーダは、ムスリムの証人2人の前で「私はアッラー以外に神はいないと証言します」「また私は、ムハンマドはアッラーの使徒であると証言します」とアラビア語で唱える。案外簡単だが、これでムスリムになれる。

● 入信—シャハーダ

15年11月初旬、昼間でも上着がないと少し肌寒

く感じる日だった。都内のあるモスクに、赤いシャツにジーンズ姿の日本人男性が外国人の男性数人と入ってきた。一度に1千人以上が礼拝できる広いスペースだが、彼らは入口から最も離れた場所に集まり、それぞれの位置に付いた。

赤と白の四角い帽子をかぶり、花の刺しゅうの入った黒い衣装を羽織ったトルコ人の男性が中央に正座した。彼はイマームと呼ばれるイスラムの宗教指導者だ。イマームの前にはちゃぶ台程度の高さが譜面台のような木製の台が置かれている。その上に、イスラムの聖典コーランと入信証明書が準備されている。その台を挟んで、イマームの目の前に日本人男性が座った。イマームの横には通訳の男性、日本人男性の横には彼をイスラムへと誘ったパキスタン人のムスリム男性が座った。そして彼らから一歩下がった後ろで男性1人と女性2人のムスリムがその様子を見守っている。

イマームが話すアラビア語を通訳が日本語にする。「なぜあなたはムスリムになろうと思いましたが」。日本人男性は日本語で説明した。そして通訳のアラビア語を聞いたイマームは大きくうなずいて尋ねた。「何か聞きたいことはありますか」「特にありません」「では私に続いてください」

イマームが話すアラビア語を復唱する。イマームに続いて単語を一つずつ丁寧にゆっくりと日本人男性は声を出した。「アシュハド・アッラー・イラー・ハ・イッラッラー(私はアッラー以外に神はいないと証言します)」「ワ・アシュハド・アンナ・ムハンマド・ラ・ラスールッラー(また私

は、ムハンマドはアッラーの使徒であると証言します」)

イマームと日本人男性の声だけが天井高くに鳴り響いている。全てを言い終えると、通訳がアラビア語の意味を日本語で説明した。

「おめでとうございます」――。モスクに入つて10分もしないうちにその儀式は終わった。日本人男性はムスリムになった。

イスラム法ではシャハーダにはムスリム男性2人の証人が必要とされる。もし男性が1人しかない場合、男性1人の代わりに女性2人を証人とすることができるとされている。

日本人ムスリムのサイエド舞さん(39)は、「ムスリムの入信は自分の意思が一番大事で、どこかのモスクに行つて入信して証明書を書いてもらうとか、そういうのは二の次」と話す。舞さん自身は04年、翌年に結婚することになるチュニジア人の夫とその夫の兄が住む日本の自宅でシャハーダをした。

場所に決まりはないが、モスクで入信すると入信証明書が発行される。入信証明書は、五行の一つで、ハッジと呼ばれるメッカへの巡礼や結婚の際に必要なもの。しかし、モスクで入信しない場合であっても、証明書は後日発行してもらうことができる。そのため大学のキャンパス内の建物の裏でシャハーダを行ったという日本人ムスリムもいる。

● 日本人がムスリムになる理由

日本におけるイスラム人口の公式な統計はない

が、日本に暮らすムスリムはおよそ11万人とされ、そのうち1万人が日本人ムスリムだとする調査結果もある。この数字は増加傾向にあるという。

日本人がイスラム教に入信する動機は大きく3つに分けられる。まずムスリムとの結婚だ。イスラム教では男性の信者と結婚できるのはムスリムか、同じ啓典の民であるキリスト教徒あるいはユダヤ教徒の女性。一方、女性の信徒はムスリム男性との結婚のみ許される。日本人信者の多くは結婚を機にイスラム教に入信する。日本人ムスリムの約8割がこのパターンとされる。1980年代後半から、パキスタン、バングラデシュ、イランなどのイスラム圏の国々から外国人労働者が日本に押し寄せ、日本のムスリム人口が急増した。彼らの多くが20代から30代の独身男性だったことから、日本人女性との結婚が増えた。

そして彼らの間に生まれた子どもは生まれながらにしてムスリムとなる。二番目がこの「ボーンムスリム」である。イスラムでは、両親のいずれかがムスリムであれば、生まれた子どもはムスリムとなる。そして最後に自らの意思で入信する日本人ムスリムだ。

04年に入信したサイエド舞さんは時々お寺に行き、初詣は神社で、クリスマスもお祝いする家庭に育った。しかし、自分が信じた宗教はなかった。ただ両親が仏教徒だから自分もそうかな、と漠然と思っていた。しかし、高校生の頃から、この世の全てを作り上げた何かがあると考えるようになった。その存在は姿、形がなく光のような明

るいもの。その正体が分かったのは、のちに結婚することになるチュニジア人の夫と出会った頃だった。

職場が近くにあり、02年に知り合った夫はムスリムだった。当時の舞さんにはイスラムは一神教というほどのイメージしかなかったという。互いを理解するためにイスラムを少しでも知ろうと思った。しかし、いくら本を読んでもよく分からない。ある日、一緒に食事をしていて夫に「日本人は誰に対していただきますと言っているの?」と聞かれた。舞さんは「料理を作ってくれた人や米や野菜を育てる農家に対してじゃないかな」と答えた。すると「じゃあその人たちは誰がつくったの?」「お父さん、おじいちゃん、ひいおじいちゃん……」「じゃあ一番最初のおじいちゃん是谁がつくったの?」とやり取りが続いた。そこでピンときた。「そういうことか。全部アッラーという神様がつくったんだ」。

アッラーとはアラビア語で唯一の神を表す。イスラム教ではアッラーが宇宙の全てのものを創造し人間もアッラーによって授けられたとされる。そしてアッラーは不可視の存在である。光の正体はまさにアッラーだった。

「曇り空が晴れたようにスカッとした」と舞さんは当時を振り返る。この経験以降、イスラムの勉強に一層拍車がかかった。入信したのはムスリムになりたいと思ったからではなく、イスラムの教えが正しいと確信したからだ。「ムスリムになりますっていうよりも、賛成ですっていう気持ち」だった。そして翌年、結婚した。

日本人がイスラムに入信する理由はさまざまだ。近年ではイスラム圏への旅行や留学が増え、さらにインターネットの普及によってイスラムに関する情報へのアクセスが容易になった。そのため舞さんのように結婚以外の理由で入信する日本人が増えているという。

● マレー語からイスラムの勉強へ

待ち合わせの東京・代々木上原駅に現れたその女性は、鮮やかな濃いピンクのロングスカートに白い長袖のTシャツ、薄ピンクのヒジャブ（女性がまとう黒い布）をかぶっていた。おまけにヒジャブにはシルバーのキラキラと光るアクセサリが付いていた。一目でムスリムの女性だと分かってたのだが、彼女ほど明るい色合いの服装をしたムスリムに出会ったのは初めてだった。その明るさは外見だけではなく、彼女の内面からにもじみ出ていた。

東京で大手IT企業に勤務する坂本亜里沙さん(23)は、入信してまだ1年にも満たない日本人ムスリムだ。

「私、チャレンジャーなところがあって、ナンバーワン精神がデカインですよ」と自分を分析する。この性格こそ亜里沙さんがイスラム教に入信する大きな要因となった。しかし、直接のきっかけは、大学でマレー語を専攻したことにある。

高校生の時、大学では英語以外の言語を勉強したいと考えていた。ある日、専攻言語で迷っている亜里沙さんに母・幸子さん(48)がマレーシアを勧めた。幸子さんは小学生の時にテレビ番組の

「新婚さんいらっしやい」で「マレーシア航空で行くマレーシアの旅」が景品になっていたことを思い出した。「景品になるんだからマレーシアっていい国なんじゃないっ」。母にそう言われた亜里沙さんはネットでマレーシアのことを調べてみることにした。親日国で、日本を手本に経済を発展させようと政府がルックイースト政策を推進していたことを知った。

「こんなふうに日本のことを思ってくれているのに、私たちはマレーシアのこと全然知らないじゃないと思って、じゃあマレーシアにしようって。ただそれくらいの気持ちでした」と笑って振り返る。マレーシアがイスラム教の国であることを知ったのは入学後の最初の授業だった。

10年に東京外国語大学に入学し、マレー語を専攻した。持ち前のナンバーワン精神で、マレー語の勉強に没頭した。勉強を始めて半年ほどがたった頃には、通訳の仕事をやるまでに上達した。しかし、頭を悩ませたことが一つあった。マレー語には、どうしても理解できない言葉があった。そのため日本語には訳せなかった。日本語で例えるなら、いただきますやごちそうさまのような言葉だった。そこで、マレー語を完璧にマスターするためにイスラムを勉強することにした。2年生になるとアラビア語やイスラムの授業にも出席した。全てはマレー語のための勉強だった。

大学3年の2月、マレーシア人の友人に連れられ、東京の代々木上原にあるモスクを初めて訪れた。マレー語を勉強し始めてから3年、イスラム

を学んで2年がたっていた。イスラムのことはある程度分かっていたつもりだった。しかし、実際に礼拝を見た時、ムスリムの気持ちまでは理解できていない自分が悔しかった。彼らはなぜ礼拝するのか。なぜ礼拝をしたと思うのか。それから半年間モスクに通い続け、周りのムスリムの動きをまねして礼拝した。マレー語のために勉強し始めたイスラムが段々と興味に変わっていった。

● 精神科医の夢をあきらめ宗教へ

小学生の頃から、人の心に興味があり、将来は精神科医になりたいと思っていた。医者になる目標を掲げて中学受験をし、神道系の中高一貫の進学校に入学した。しかし、家庭の事情から夢をあきらめなければならなくなった。それでも人間の見えない部分への興味がなくなることはなかった。

「それが宗教になったのかもしれないですね」なぜ人は宗教を信じるのか。人の心の拠り所になる宗教をもっと知りたくなった。精神科医への夢をあきらめたのち、元々関心のあった宗教の勉強に力が入った。座学だけではなく、実践にも力を入れた。大学生になり、長期の休みがあると日本を飛び出し海外に行った。大学1年の夏にフランスでキリスト教の巡礼をし、4年生の8月にはマレーシアでヒンズー教のお祭りに参加し、クロアチアでは毎週ミサに参加した。(次号に続く)
(本稿は早稲田大学大学院在学中に書いた修士論文を一部加筆修正した。筆者は現在、共同通信社に在籍している)